



甲の原学院の中庭で、3 歳ごろ

グループホームのあるべき姿

～施設福祉から地域福祉へ～

富士聖ヨハネ学園支援部長

米川 崇

障がい者が地域（この場合の対極語は入所施設）で暮らすということは、結構大変なことです。まず生活する費用の捻出、そして住居と昼間過ごす（活動する・若しくは就労する）場所の確保、更には地域住民の理解等々。今から 60 年近く前、昭和 31 年に私が今勤める「富士聖ヨハネ学園」の前身である「甲の原学院」が東京八王子に出来ました。当時学院の職員であった私の父が障がい児のいる家庭を訪問すると、たいがい「座敷牢」まがいの部屋にその子は帯紐で柱につながれていたそうです。そしてあまりの状況にそのまま学園に連れてきたこともある、そんなことを生前話していました。

父は当時そのような状況にある子どもたちを施設に入れることこそが彼らの幸せにつながると思っていたはずです。そのため、父達知的障がい者施設関係者（団体）はもっと施設の量と質の充実を図るよう行政に働きかけを行いました。経済成長とともに障害者福祉関連予算は飛躍的に伸びました。しかしそこには落とし穴がありました。施設関係者が障害者の代弁者となっていたのですから、どうしても政策は地域福祉ではなく、施設福祉に偏ってしまっていたのです。そしてもう一方の代弁者である保護者も「自分達亡きあと、安心して暮らせる場を！」という声を挙げ施設福祉を後押ししたのです。

各地にコロニーという大規模施設が出来上がる頃、今度は施設の職員の中から「これでいいのか？」と施設のあり方（地域から隔離された立地と暮らしぶり、余りに管理的な処遇）に疑問を投げかける動きが出てきます。ノーマリゼーションの概念が伝わってきたのもこの頃でした。しかし今から 30 年前には施設を出て地域で暮らす方策はありませんでした。グループホームという言葉はありましたが、まだそれは制度の裏づけの無いものでありましたから、施設を出てグループホームをつくりたいければ、自分達で生活費を捻出することが必須条件でした。にもかかわらず、主に施設の指導員を辞した方々が、農業・養鶏・廃品回収等の仕事を障がい者と行い、その売り上げを運営費とする、グループホームというよりも職親的な取り組み（私はワーキング・グループホームと呼びました）で地域での生活の実践を始めたのです。そこに「あさひ福祉作業所」もありました。

正直なところそれらの実践に関して、口さがない連中からは「なんでわざわざそんなことをするのだ」「施設にいた方が安心だろうに」「どうしてあんな貧しい生活環境（失礼！）がいいのかしら」「施設にいればあんなに働かなくても暮らせるの

に」との声も聞かれました。

がしかし、そこで働き暮らしている人たちは、施設ではあまり感じる事が出来なかったであろう「私達一人ひとりがそこでの生活に必要とされているのだ。」というプライドを各自持つことが出来ました。ですから施設の生活とは比べ物にならない厳しい生活であっても、誰も「施設に戻りたい」とは言わなかったのです。

その後、わが国にもようやくグループホームが制度化され、現在の自立支援法では、障がいが比較的軽い方を対象としたグループホーム（GH）と、重たい方を対象とするケアホーム（CH）の2種類を規定しています。国の政策の転換が図られ入所施設からGH・CHへの移行が進められています。でもいくらGH・CHを作ってもそれが施設福祉から地域福祉への転換と呼べるかはそこでの暮らしぶり次第です。GHの制度化に尽力された、当時の厚生省障がい福祉専門官の中澤健先生は、「GHは施設を単に小型化したものではない」と述べてらっしゃいます。そこに地域社会との隔絶や、明らかに管理的な日常生活があるならば、「施設の小型化」に他なりません。

では「あさひテレサホーム」はどうでしょうか？私がここに来て思うことは、みんな生き生きとプライドを持って働いているということ。だから生活に張りがあり一人ひとりに表情があります。そしてもう一つ大きなことは、地域の方との交流が盛んであるということです。それは交流会のあの盛況ぶりに象徴されています。

守屋さんが車椅子での生活を余儀なくされた時に、島さんが本人に「この後どこで生活したいか」と尋ねたそうです。すると「みんながいるからずっと“あさひ”にいたい」と彼は答えたとのこと。

やっぱり“あさひ”は年季が違います。“仕事があり、くらしがあり、地域があり、そして仲間がいる。”GHのあるべき姿がここにはある、そう思います。

（守屋さんの障害程度区分の変更を受けて、あさひテレサホームは8月1日より、GH単独型から、GHとCHの一体型に事業種別が変わりました。入居者の人数等に変更はありませんが、支援体制が少し厚くなります。）



あさひの皆さんと共に 20年

教えられて育てられて



ボランティア 岩永 幸子

横須賀から山梨の長坂に越して来た当時（昭和63年）は週毎に韮崎の教会へ行くだけでした。2～3年経ったころ年月は定かではありませんが韮崎カトリック教会に来ておられたシスター、テレジア美和子さん（イエスの小さき姉妹の友愛会）が誰かあさひ福祉作業所に行って手伝ってくれませんかと云われ、不安な気持ちもありましたが立候補致しました。シスターはあさひで卵拭きの仕事をしておられた

ようです。お正月に皆さん交代で里帰りのため人手が足りないのです。こちらでは鶏舎から集めた卵を一個ずつきれいに拭きます。寒い作業所で夫と二人で一生懸命でした。

外は寒くとも仕事が終わったあとの心はほのぼの暖かかったと覚えております。年輩の私共を受け入れて下さった島さんご夫妻に感謝致しました。又鶏舎に入り卵集めも致しました。雄鶏に付きまとい逃げると先輩のえみちゃんともう一人の男性に棒でたたけとか蹴飛ばせとか教えてもらいました。雄鶏は女だと思って見くびっていた様です。その頃夫は勤めておりましたが朝夕の送迎をしてくれました。週一回のことですが。

そのうち武代さんがパンを焼き始められたので、そちらの手伝いをする事になりましたが、何も出来ない私を導いて下さり有難かったです。パン工場は小さな所でしたが国産の小麦粉で食パンや菓子パンを焼いておりました。小さな場所でもそれなりに充実していました。

そのうち小さな加工場の下に現在の加工場が出来てそこに移りました。こちらでは本格的に天然酵母を使ったパン、又自然食品用材料を使いケーキも作り始めました。武代さんがパン教室に通い私共に教えて下さいました、私は年を重ね覚えも悪く失敗の連続、申し訳なさい一杯、「かまど」の前でどうぞ無事に焼けますようにと祈ること暫々。(今でも)それから葦崎教会の皆様にあさひの卵を買って頂くことも、シスター、テレジア美和子さんの提案でした。それが現在も続いております。教会の皆様有難うございます。

寮生の皆さんは5月の連休、お盆休み、お正月等には里帰り致しますが、帰る所のない女子2名ばかり私の家に来てもらい、一緒にお正月のおすしを作ったり温泉に行ったり。恵美子さんはいつも履物を揃え、着る物をきちんと畳んで枕元に揃えたりと感心しました。或る年は八景島のシーパラダイスに3人で楽しい時間を過ごしました。横浜の中華街に近いホテルに泊まり、帰途八王子で中央線に乗り換えの時、恵美ちゃんの姿が見えず大慌て、よし子さんを階段下に待たせ探し廻りました。又或る時は、別所温泉へこの時は新しくあさひに入寮した清美ちゃんも一緒、この方はとてもしっかりしていましたので帰るとき支払いに行ってくるからよし子さんと恵美ちゃんをみていてねと頼んだところ「私はこの子たちの付き添いじゃないよ、何で私が面倒を見るの」と大そう叱られてしまいました。そうですどんなにもしっかりしていてもこういう場合は自分も面倒を見てもらう立場で旅行しているのだと思い知らされ大きな勉強をさせてもらいました。

あさひに行って自然食品のこと、加工品の作り方そして入所者との付き合い方など暗黙のうちに教えられました。これは大きな宝物です。週一回の仕事ですが歳を重ねて来て、これからは私のほうがお荷物になるのではと危惧致しております。武代さん無理だと思われたらいつでも良きにお計らい下さい。

ここまで育てて下さって有難うございました。
感謝のうちに。



あさひ福祉作業所のもうひとつの顔

米、大豆づくり等

島 武代

今年も春より田植え、大豆播き、馬鈴薯の植えつけ等はじまりました。(あさひはすべて有機無農薬栽培です) 田んぼは50アールのうち11アールがもち米(コガネモチ)、39アールがうるち米(コシヒカリ)です。

田植えは5月26日~28日に米の会メンバー6名と、雲柱社の職員30名の応援を受け、機械植えと手植えで行いました。

除草剤を使わないので、草やヒエとりが重要ですが、どうしてもタイミングをはずしてしまい7月いっぱい週5日はヒエとりをしていました。

時には衣笠春子さん、たえ子さん、鈴木美智子さんが応援にかけつけて下さり、大変な中にも、ホッとするなごやかなひとときがあります。この時はヒエとりの市村さんもヒエ運びの南さんも笑顔です。無論、武代さんも笑顔ですよ)

大豆は8アールに播き、去年は13アールの畑で180kgの収穫がありました。連作はきらうため、今年は8アールの畑に播きました。順調に成長していますが、田のヒエとりに夢中になっていると、大豆より草の方が大きくなってしまいました。



今年の春は、味噌を200kg仕込み、来春より販売いたします。(米こうじはあさひの米をつかい、こうじ作りから取り組んでいます。)

馬鈴薯は、あさひの鶏舎の跡地を畑にし、5月3日に播きました。

ワークキャンプ(8月13日)の子供たちに掘ってもらい、なんと150kgの収穫がありました。あさひでは消費しきれませんので、希望の方はお申し出下さい(ホクホクした美味しいじゃがいもです)

これからは白菜、大根播きが始まります。農作業は播く時期が有り、これをのがすとすとうまくいきません(去年は失敗しました)

鶏舎は風通しをよくし、トタンの屋根の内側を藁でおおい、トタンからの輻射熱をやわらげ、西日対策として、蔓を這わせました。(あさひではゴーヤです)

今年の鶏たちは元気で産卵も順調です。但し、夏は八ヶ岳高原への観光客の激増で卵の絶対量が不足してしまいます。

今はゴーヤが実り、あさひの食卓をにぎわしています。





階段昇降機を設置しました

草場 泉

守屋勝さんは、あさひで長年鶏のえさを作る仕事をしていました。もともと歩くのが不自由で、杖をついて歩いていましたが、最近になって不自由の度合いが増して来て、寮の壁に手すりをつけて、つたえ歩きをするようになってきました。

昨年（2011年）9月頃からひどい腰痛と発熱を訴えるようになり、10月1日、入院しました。

病名は「左腸腰筋膿瘍」でした。

その後、一時的に退院しましたが、完治していなかったため再発し、再入院、転院、またもとの病院に再々入院をして、その後、今年の5月21日、退院してあさひに戻って来ました。

退院後、約1ヶ月間、1階の和室に電動ベッドを入れて過ごしていましたが、和室はプライバシーも保てず、2階の自室に戻ることを希望していました。

そこで、2階に上るため、6月19日、階段昇降機を取り付けました。長い間の入院期間中のリハビリで車いすでの移動もとても上手になり、昇降機も、スタッフが見守る中、自力で移乗、操作しています。

2階の個室も階段の脇に替わってもらい、電動ベッドを入れるとともに荷物を片付けて、風通しのいい部屋で清潔に暮らしています。

トイレやお風呂も自分で行けるようになりました。

今は勤務のある日には、古新聞をブロック状に固めた固形燃料作りをしています。





とく先生

と



あさひテレサホームの仲間たち

平成 24 年 6 月 16 日（土）を終えて・・・

中山 正博

吉村音楽教室の主催で、高根ふれあい交流ホール
“八ヶ岳やまびこホール”にて初めての発表会を開催
することができました。この場をおかりして改めて吉
村先生と衣笠春子さんに御礼申し上げます。ありが
うございました。



お手伝いいただきましたボランティアの方々を含
め、ご来場いただきましたお客様等など、この場に
集ったひとりひとりが、それぞれの楽しい一時を過ごせたことを感じる
ことができた
ホームコンサートでした。



この音楽の輪が、少しずつ広がっていくこと
を通して、地域の皆様とつながっていければと
思います。



特定非営利活動法人あさひ あさひテレサホーム

〒408-0002 山梨県北杜市高根町村山北割 86-6

TEL 0551-47-3950

FAX 0551-47-4414

asahi-fukushi@cd.wakwak.com

賛助会費・寄付金等

★郵便局振込★ 00220-1- 98254

編集者：中山 正博